

7.女谷・荒坂横穴群第10・11次 発掘調査報告

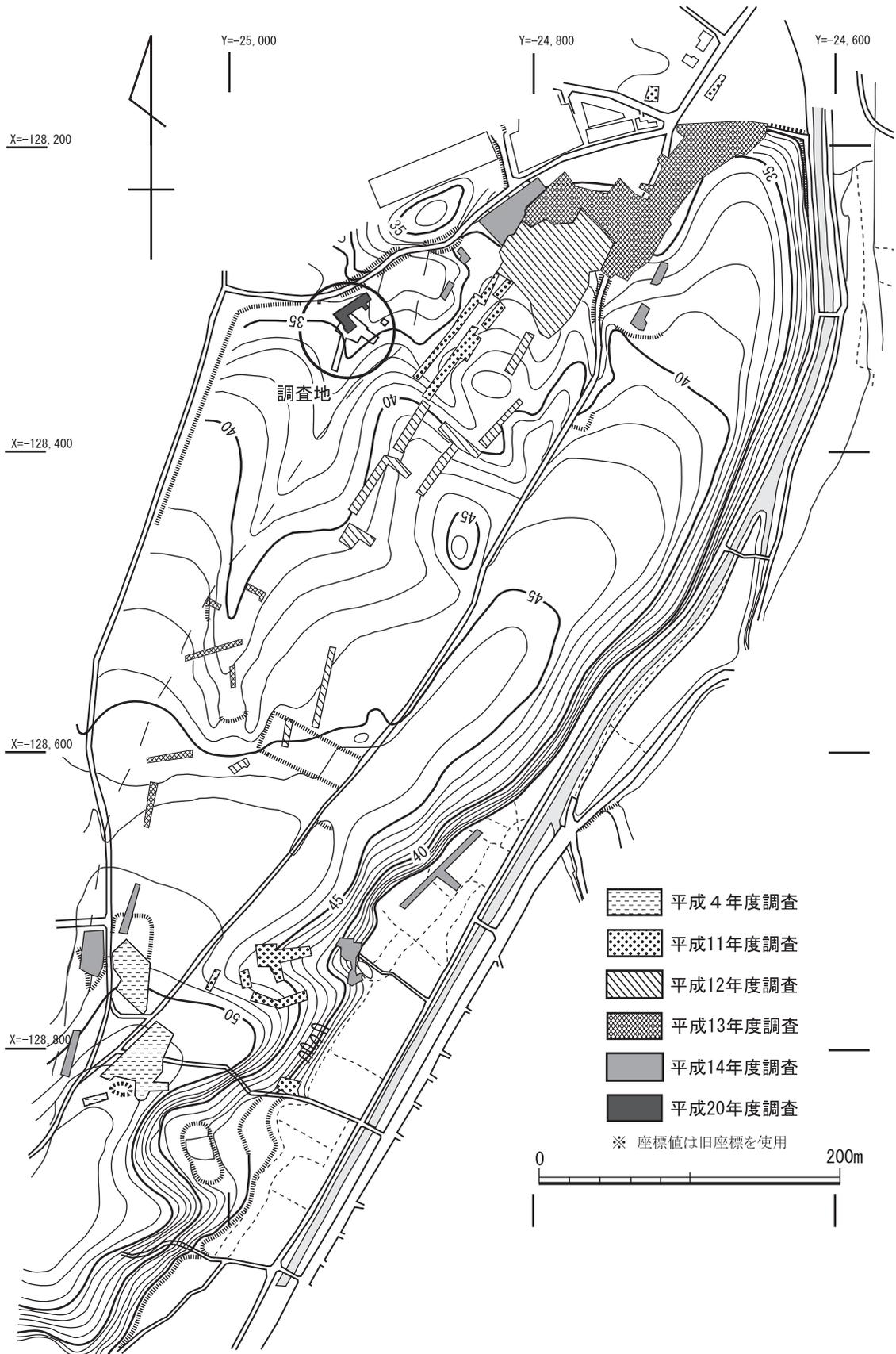
1. はじめに

今回の発掘調査は、新名神高速道路整備事業に伴い西日本高速道路株式会社（NEXCO西日本）の依頼を受けて実施した。平成20年度には工事に先立ち、対象地内に小規模なトレンチを設定して遺構・遺物の有無を確認するとともに、面的な調査を実施する範囲を策定するための資料を得ることを目的に調査を実施した。平成21年度には前年度の調査成果を元に谷の北斜面を中心に拡張し、面的な調査を実施しているところである。八幡市教育委員会と調整した結果、平成20年度



- | | | | |
|-------------|-----------|---------------|----------|
| 1 女谷・荒坂横穴群 | 9 内里池南古墳 | 17 金右衛門垣内遺跡 | 25 南山古墳群 |
| 2 御毛通遺跡 | 10 柿谷古墳 | 18 宮ノ背遺跡 | 26 南山遺跡 |
| 3 御毛通古墳 | 11 狐谷横穴群 | 19 西ノ口遺跡 | 27 山田遺跡 |
| 4 荒坂遺跡 | 12 美濃山横穴群 | 20 備前遺跡 | 28 山田東遺跡 |
| 5 荒坂古墳 | 13 王塚古墳 | 21 幸水遺跡 | 29 五反田遺跡 |
| 6 新田遺跡 | 14 小塚古墳 | 22 東二子塚古墳 | 30 ヒル塚古墳 |
| 7 美濃山廃寺 | 15 美濃山遺跡 | 23 西二子塚古墳 | |
| 8 美濃山廃寺下層遺跡 | 16 宮ノ背西遺跡 | 24 西山廃寺（足立寺跡） | |

第1図 調査地及び周辺遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 淀)

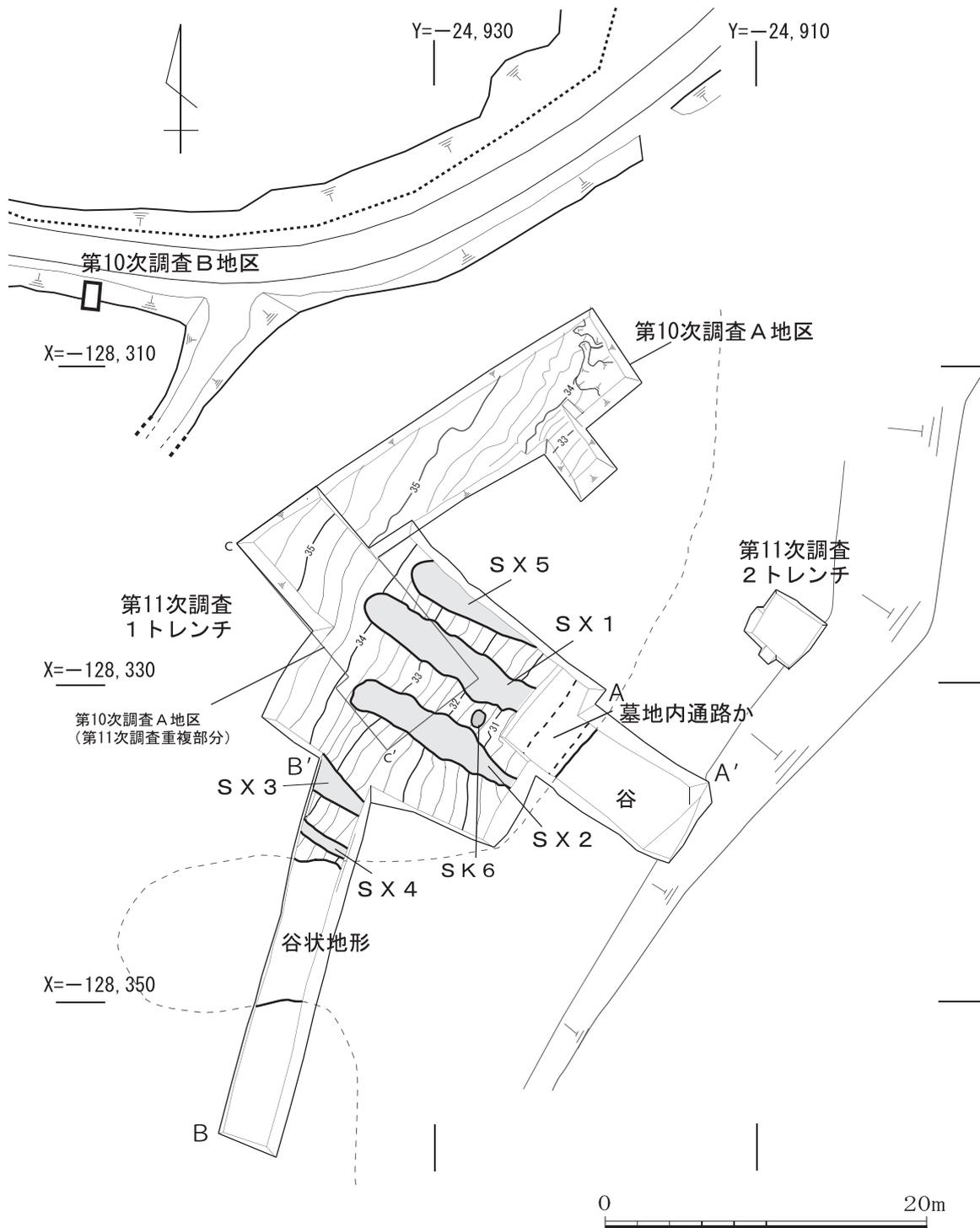


第2図 調査地トレンチ配置図

調査を第10次調査、平成21年度調査を第11次調査とすることとなった。なお、本報告では、第10次調査と第11次調査の前半期までの調査成果を扱う。

調査期間は、第10次調査が平成21年1月28日～同年2月26日で、第11次調査は平成21年7月10日～9月10日(前半期)、10月27日～平成22年2月25日(後半期)まで実施した。

調査面積は、第10次調査がA・B地区を合わせて250㎡で、第11次調査は、前半期の調査が400㎡、後半期の調査が1,600㎡、計2,000㎡である。



第3図 検出遺構配置図

現地調査は、第10次調査は当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第3係長石井清司(当時)、調査員村田和弘が、第11次調査の前半期の調査は、調査第2課主幹事務取扱調査第3係長石井清司、調査員松尾史子が担当した。後半期の調査は、調査第2課課長補佐兼調査第1係長小池 寛、主任調査員引原茂治、主査調査員柴 暁彦、次席総括調査員伊野近富が担当した。本報告では、第10次調査と第11次調査の前半期の調査成果について報告する。

調査に当たっては、京都府教育委員会をはじめ八幡市教育委員会などの関係諸機関のほか地元自治会の協力を得た。

なお、調査に係る経費は、全額、西日本高速道路株式会社が負担した。報告に使用したのは、過去の調査との整合性を保つため、日本測地系第6座標系である。

2. 位置と環境

女谷・荒坂横穴群は、京都府八幡市大字美濃山荒坂に所在する、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての墓である。女谷B・C支群については、一般国道1号(第二京阪道路)の建設工事に伴い、平成11年度から平成14年度まで発掘調査が実施された。総数約50基に及ぶ横穴から人骨を含む多くの遺物が出土し、当時のこの地域の墓制を知る上で貴重な資料が得られた。今回の調査地は、遺跡の北西部にあたり、過去に調査された谷より南西方向にある別の谷に位置する。調査の結果、横穴が確認され、新たな支群と認められたので、女谷D支群と^{註1}呼称することとなった。

(松尾史子)

3. 第10次調査概要

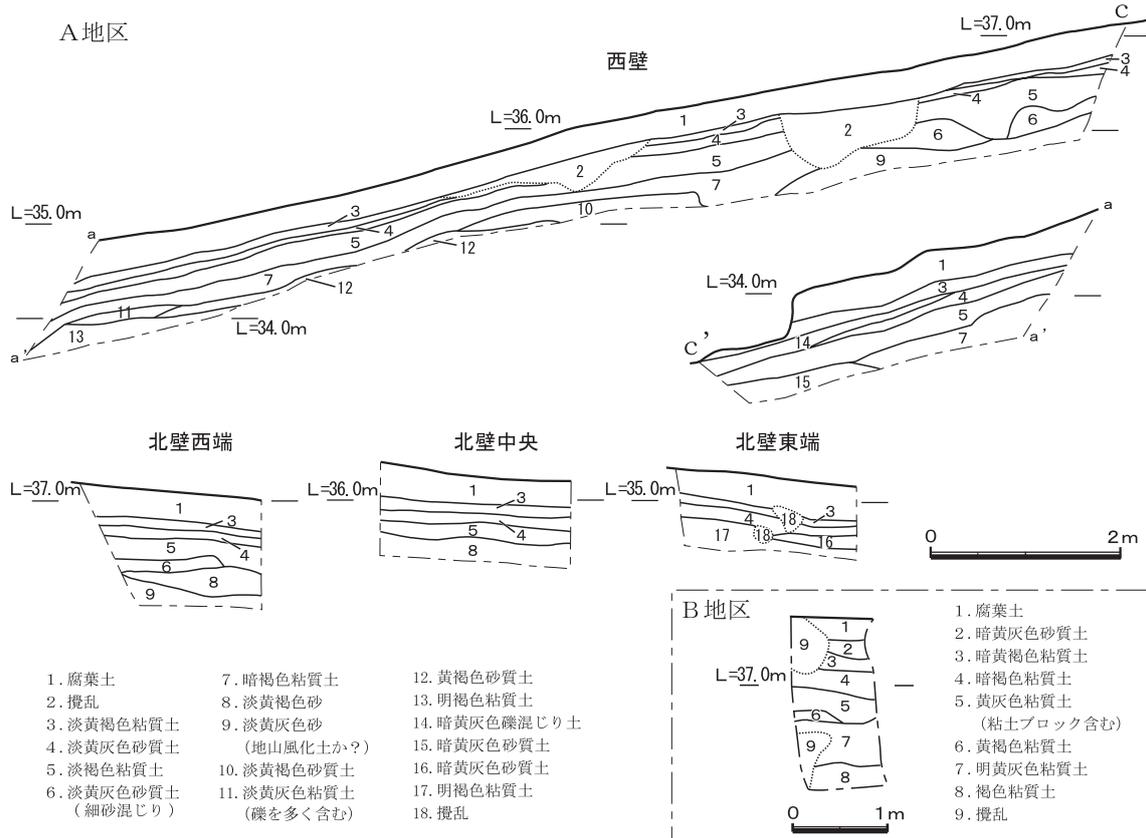
1) はじめに

第10次調査では、遺跡範囲の北西端部の谷筋に調査地点を2か所設定した。A地区は調査対象地内の南東に向かって傾斜する斜面に設定し、B地区は現在の里道となっている切り通し斜面に設定した(第2・3図)。

2) 調査の概要

(1) A地区 基本層序は、第1層として厚さ0.4mほどの腐葉土が堆積し、その下に第3層の礫が混じる淡黄褐色粘質土が堆積している(第4図)。この層は竹林の水はけ用の造成と考えられる。第4～8・10・14・15層については、竹林造成の盛土と考える。また、第11・12層については、硬質であることから、横穴の天井部が後世に造成によって削平されたものの残部とも考えられる。約1mの深さで、安定地層(第9層上面：地山面)を確認した。また第13層の明褐色粘質土は横穴の埋土と判断された。

調査は、着手する前に現存する竹の伐採を実施し、掘削は現地表面から重機による掘削を進めた。その後、人力による遺構・遺物の検出作業を行った。その結果、トレンチ南西部の斜面で暗茶褐色の溝状の土色変化を検出した。遺構は、大阪層群の砂礫層をくり抜き横穴状に掘り込まれており、その形状から横穴であると判断できた。また、その西側で同様の土色変化を検出し、



第4図 A・B地区土層断面図

同じく横穴と判断した。西側を横穴S X 1、東側を横穴S X 2とした。なお、今回の調査は遺構の確認のみで、遺構を完掘していないため、時期や内部構造については不明である。

(2) B地区 調査は、対象地内において、丘陵を切り通されてつくられている里道の西側壁面とその頂部に設定した(第2・3図)。精査の結果、現地表面から約1.6mで地山面に達したが、遺構・遺物は確認できなかった。

3) 小結

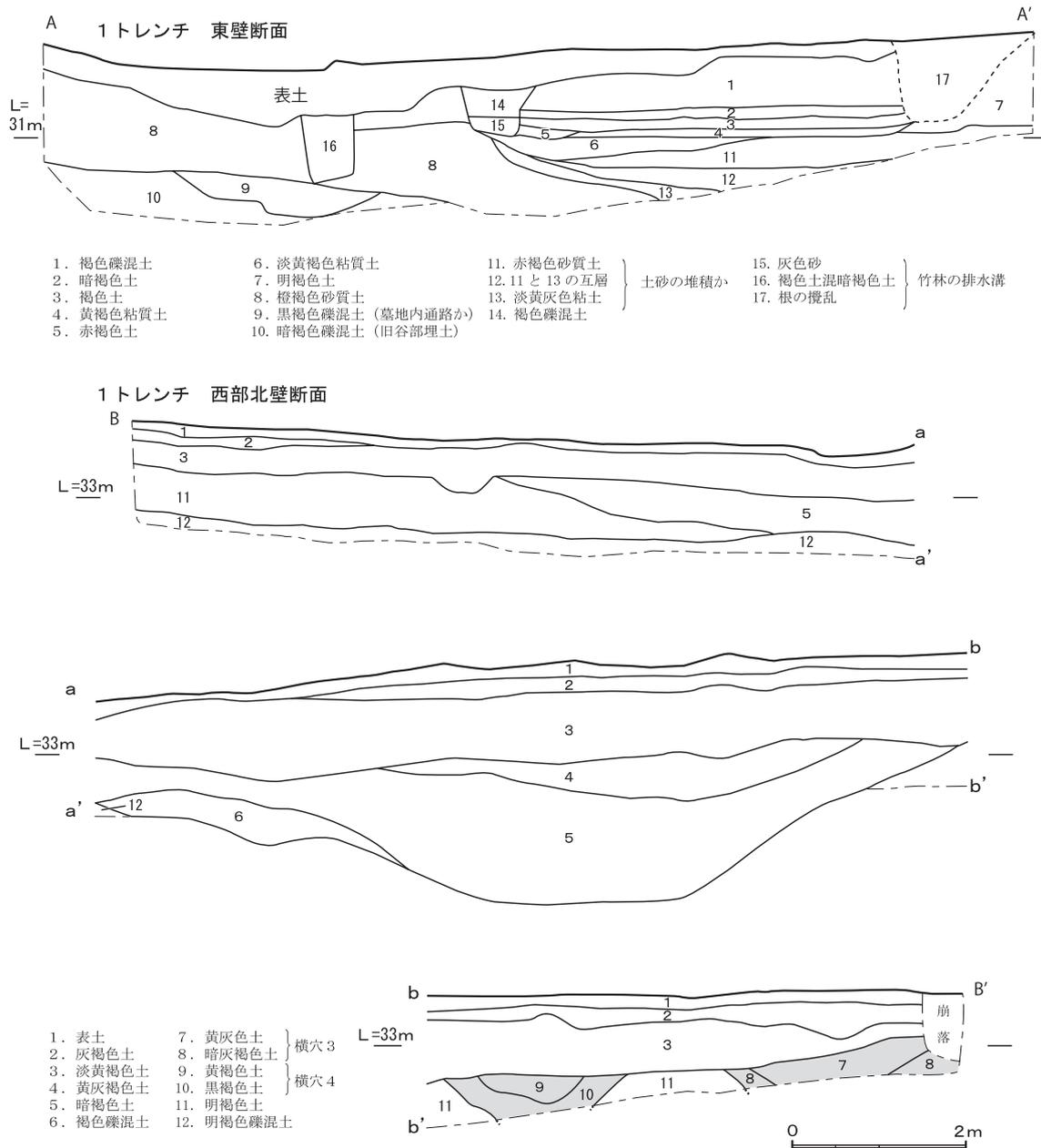
平成20年度の試掘調査では、調査地南西部の南斜面において横穴を2基検出した。この2基の横穴は、同一方向を向き南東に開口しているが、掘り込まれている高さが異なる。横穴S X 1は、標高32.5mあたりから掘り込まれ、横穴S X 2はさらに0.5m以上の低位置から掘り込まれていることから、横穴の埋葬面の高さが異なっていると考えられる。この傾向は、これまでの女谷・荒坂横穴群の調査でも確認されている。今回の調査で2基の横穴を確認し、この谷筋がさらに西側や北東側に続いていることから、さらに横穴が分布していることが予想された。

(村田和弘)

4. 第11次調査概要

1) はじめに

平成20年度の試掘調査の成果を受け、谷の北西側斜面で確認した2基の横穴部分(横穴1はS



第5図 第1トレンチ土層図(土層図位置は第3図参照)

X1、横穴2はSX2とする)を拡張して内部の調査を実施するとともに、さらに西側に拡張して横穴群の広がりを確認した(第1トレンチ)。また、谷の南側斜面の状況を確認することを目的に、第1トレンチの北東側に調査区を設定した(第2トレンチ)。

その結果、第1トレンチでは新たに3基の横穴と土坑1基、墓地内通路の可能性のある谷状地形を確認した。また、調査地西部中央付近では西に延びる小さな谷状地形を確認した。第2トレンチでは、谷の中央部に当たっていると考えられ、地表下約2mの深さまで掘削してもベースとなる土層に至らなかった。

第1トレンチにおいて新たに3基の横穴が確認でき、谷の北側斜面にさらに横穴群が広がることが予想されたことから、平成21年度中に拡張して調査を行うことになった(後半期の調査)。

2)調査の概要

(1)第1トレンチ

横穴が分布する谷は北から南西方向に向かう谷で、第1トレンチは試掘調査において谷の北西側斜面を中心に設定されたA地区を拡張した調査区である。調査にあたっては、トレンチの中央部において昨年度調査で確認した2基の横穴の全体の輪郭を検出するため、竹林に伴う土層の下に厚く堆積する黄褐色系の土砂を重機で掘削し、明るい礫混じりの褐色土上面で遺構の検出に努めた。この斜面を形成するベースとなる土層は、標高の高い方は大阪層群であるが、横穴の墓道先端付近の低い方は、横穴群がつくられる前に谷部に堆積した暗褐色礫混土である(第10層)。谷の斜面の傾斜は約15度の急斜面である。横穴を覆う黄褐色系土は谷の中央に向かって厚く堆積しており、東壁の断面観察(第5図A-A')から谷の中央部ではその上に厚く橙褐色系の土砂が堆積していることがわかった。また、横穴と谷の間には幅2.4m、深さ0.4mの溝状の落ち込みが確認でき(第9層)、過去の調査において墓地内通路と評価された溝と同様の遺構ではないかと考えた。この通路状の溝はわずかに横穴S X 2の墓道先端部と重複している。

トレンチ南東部は横穴S X 1の開口部の延長にあたり、横穴と谷部の関係を把握することを目的とした。調査では、谷の北肩部分を確認した深さまで掘削し、谷の埋土は完掘していない。

トレンチの西部中央付近、横穴S X 4の南側では、幅16m、深さ1.6mの小さな谷状地形を確認した(第5図B-B' 第5層)。この小さな谷状地形は、横穴S X 2の開口部あたりで横穴が分布する中心の谷から分岐して西の方に続いており、調査区外へと延びる。北壁の断面観察では横穴との前後関係は確認できなかった。なお、谷状地形の埋土からの出土遺物は無かった。

また、図示していないがトレンチ南東部の南壁の観察により、谷の南斜面と考えていた傾斜地は現在調査区の東側に走っている第二京阪道路の側道を造成した時の盛土であることが明らかになった。本来の谷の南側斜面はもっと側道よりに位置すると考えられる。

なお、2基の横穴については、前半期の調査において、閉塞土を残した状態で一旦作業を中断し、後半期の調査を再開してから完掘した。そのため、閉塞土の下から出土した遺物については来年度以降に改めて報告する予定である。

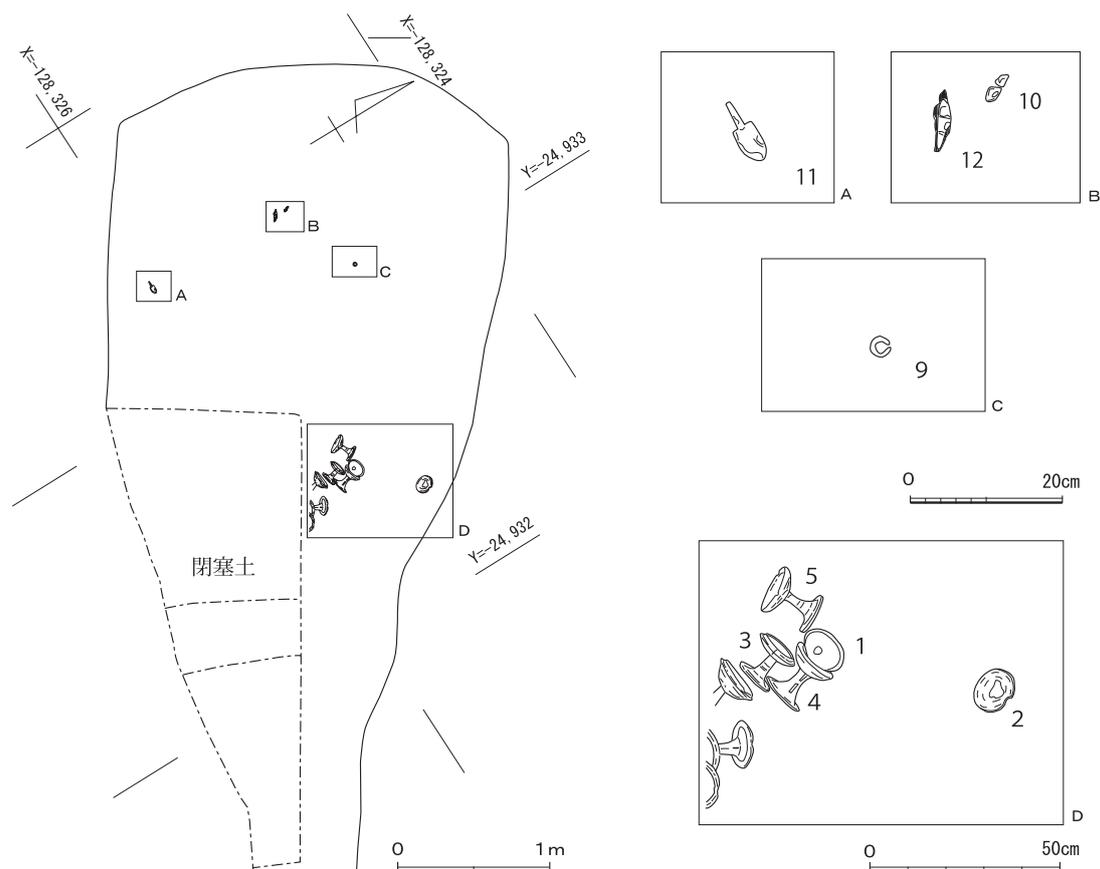
ここでは、前半期の調査で明らかとなった遺構と遺物について報告する。

①横穴S X 1

横穴の規模および形態(第6図)

南東方向に開口する横穴である。玄室長3.5m、玄室最大幅2.5m、墓道長8.2m以上、墓道の上幅2m、下幅0.5mで、玄室の平面形は羽子板形である。玄門の位置には閉塞盛土が位置する(第6図23・26層)。羨道の有無は不明である。玄室床面は1面のみで、標高は31.9mである。床面は半分から奥は地山を利用しているが、入り口側から半分については土を入れて床面を平坦にしている。奥壁は、床面から0.5mより上の部分は大きく崩落している。天井はほとんど崩落していた。

土層の堆積状況は、第6図のとおりである。玄室内は、天井や壁の崩落土である明褐色系礫混



第7図 横穴SX1 遺物出土状況図

土または赤褐色系の土砂で埋まっており、墓道の埋土は暗褐色系礫混土(4・5・10層)であった。天井崩落後に表土化した2・3層が堆積していることから、墓道は入り口封鎖後もオープンであったのではないかと考えられる。なお、閉塞土は半分のみを掘削し、残り半分については後半期の調査で掘削したため、本報告では半分残った状態での報告となっている。

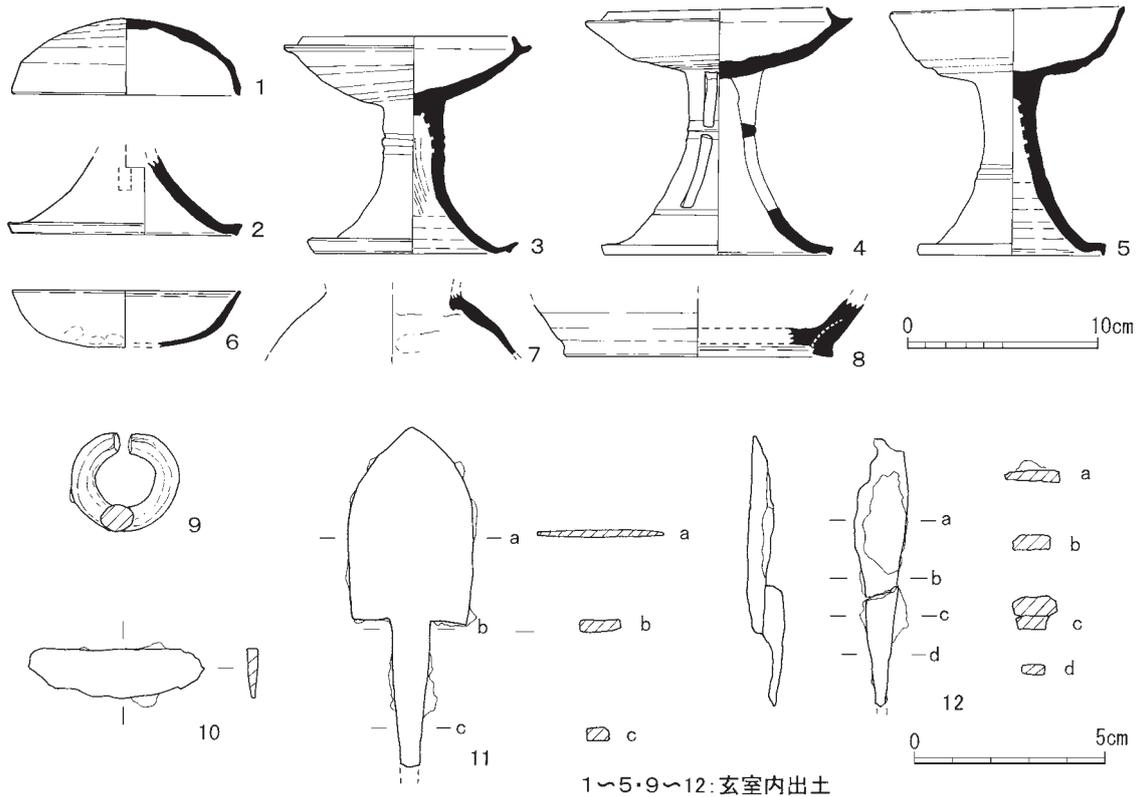
遺物出土状況(第7図)

玄室内からは須恵器高杯7点、杯蓋1点、金環2点、鉄鏃2点、刀子片1点が出土した。鉄鏃(11)は玄室中央の右側壁寄り、鉄鏃(12)と刀子(10)は、金環(9)と同じく玄室中央付近で出土した。他の金環は剥離した金メッキ部分のみで、玄室精査中に出土した。須恵器の杯蓋(1)と高杯(3~5)は、玄室の入り口付近で、様々な方向に倒れた状態でまとまって出土した。人骨や棺材は出土していない。

また、墓道掘削中に土師器(6・7)や、横穴より新しい時期の須恵器片(8)がわずかに出土した。

出土遺物(第8図)

1~5・9~12は玄室内から出土した。1は須恵器杯蓋で、口径11.8cm、器高4.0cmを測る。2は高杯の脚、3・4は有蓋高杯、5は無蓋高杯である。4の脚部には方形2段透かしを施すが、3・5は透かしはなく、2条の沈線を巡らす。これらは概ねTK209~217段階の資料と考えられる。なお、須恵器高杯は、一部閉塞土に埋没していて取り上げていないため図示していないもの



第8図 横穴SX1出土遺物実測図

がある。9は金銅製の耳環である。断面形は楕円形で長径8mm、短径7mmを測る。緑青が進行しており鍍金はわずかに認められる程度である。耳環は2点出土したが、もう1点は剥離した金メッキの部分のみであり、図示できなかった(図版第12)。10は鉄製品である。長さ4.5cm、幅1.3cmで、断面形から刀子と考えられる。11・12は鉄鏃である。11は平根系の鏃で、全長9cm、身部は幅3.3cm、厚さ2mm、頸部は幅1cm、厚さ2mmで断面形は長方形である。木質等の付着はみられない。12は全体形は不明であるが、断面の形状から鉄鏃と考えられる。身部については不明である。頸部は幅1cm、厚さ2~3mmで断面形は長方形である。図示したように途中で折れて食い違いに接合した状態で錆が進行している。木質等の付着はみられない。

6~9は墓道掘削中に出土した。6は土師器杯である。口径11.8cm、器高3.0cmを測る。墓道先端付近の検出面で出土した。7は土師器の壺もしくは甕の頸部である。頸部径7cm、残存高3.4cmである。墓道先端部付近の上層の埋土(第6図第2層)から出土した。8は奈良時代~平安時代の須恵器壺の底部である。墓道の埋土の最上層(黄褐色土)から出土した。

②横穴SX2

横穴の規模および形態(第9図)

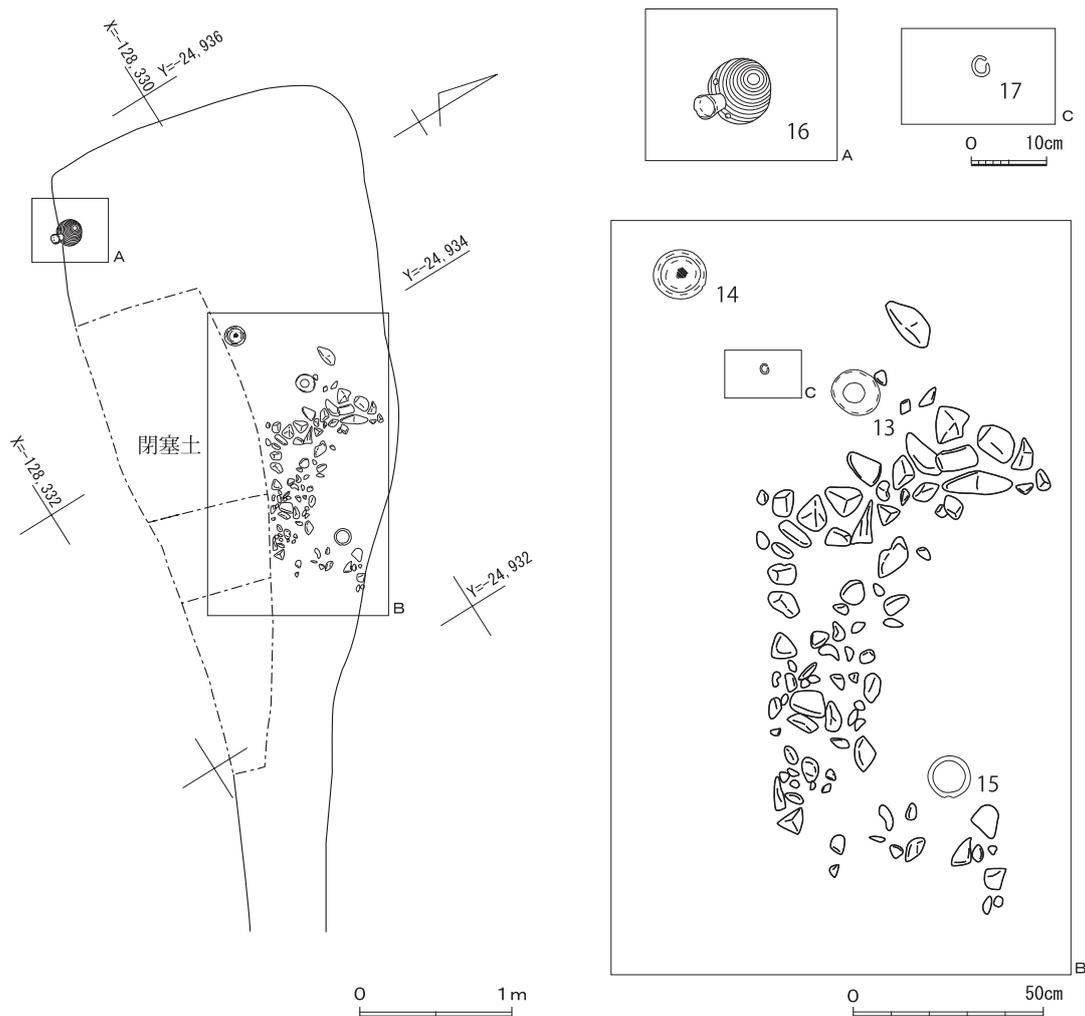
南東方向に開口する横穴である。玄室長2.1m、玄室最大幅2m、墓道長9m以上、墓道の上幅2m、下幅0.5mで、玄室の平面形は羽子板形である。玄室は墓道に対して大きく南に屈曲する。玄室床面の標高は31.5mである。玄室床面は、奥壁側半分は地山を利用しているが、入り口側から半分は土を入れて全体を平坦にしている。また、入口付近のみ礫敷が施されていたようである。

玄門の位置には閉塞盛土が位置する。羨道の有無は不明である。

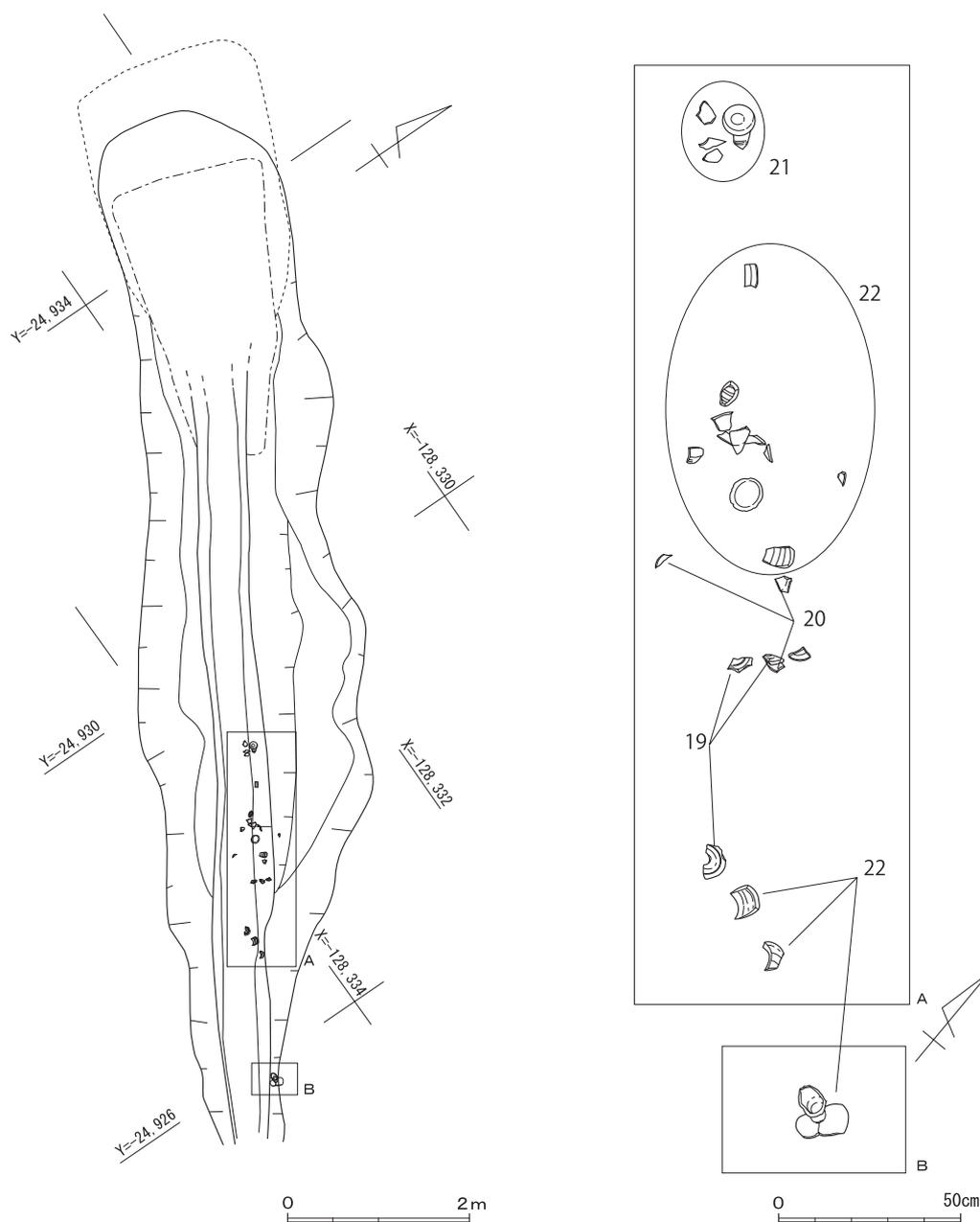
土層の堆積状況は第9図のとおりである。1～4層は天井崩落後に堆積した土層である。14・16・19層は玄門付近に山状に堆積しており、閉塞土の可能性がある。玄室内は天井や壁の崩落土(赤褐色系の礫混土)で埋まっていた。1～4層を掘削後、墓道内では21層が幅0.5m、長さ8.5m以上にわたって溝状に確認できた。この層からは須恵器がまとまって出土しており、横穴を再利用した際に掻き出された可能性が考えられる。過去の調査成果においては同様の遺物出土状況がみられ、墓道内通路出土遺物と評価している。今回も同様に評価しておきたい。^{注2}また、1・2層の堆積状況から横穴S X 1と同様、墓道は入り口封鎖後ある程度オープンであったと考えられる。なお、閉塞土の西半部については、後半期の調査で掘削したため、本報告では半分残った状況で報告する。

また、墓道中央には長さ2.6m、幅0.4m、深さ0.2mの土坑が掘削されており、墓道の床面と同じ高さまで淡黄灰褐色礫混砂質土(25層)で埋められていた。過去の調査例と同じく水抜き用の施設と考えておきたい。

遺物出土状況



第10図 横穴S X 2 遺物出土状況図



第11図 横穴 S X 2 墓道内遺物出土状況図

玄室内からは金銅製耳環(17)や須恵器の提瓶(16)、杯身(13・14)、高杯(15)が出土した。提瓶は、玄室奥壁寄りの右側壁に立てかけられたような状態で出土した。杯身は玄室中央付近で、13が正位で、14は逆位で出土した。耳環は13と14の間で出土した。高杯は玄室の入り口付近で出土しており、脚部は欠損していた。人骨や鉄器、棺材は出土しなかった。

また、前述のように墓道の埋土からは須恵器がまとめて出土した(第11図)。須恵器は墓道中央付近から先端付近まで広範囲に分布しており、破片化している率が高いことから追葬もしくは再利用の際に、玄室内にあったものが掻き出されたと考えられる。

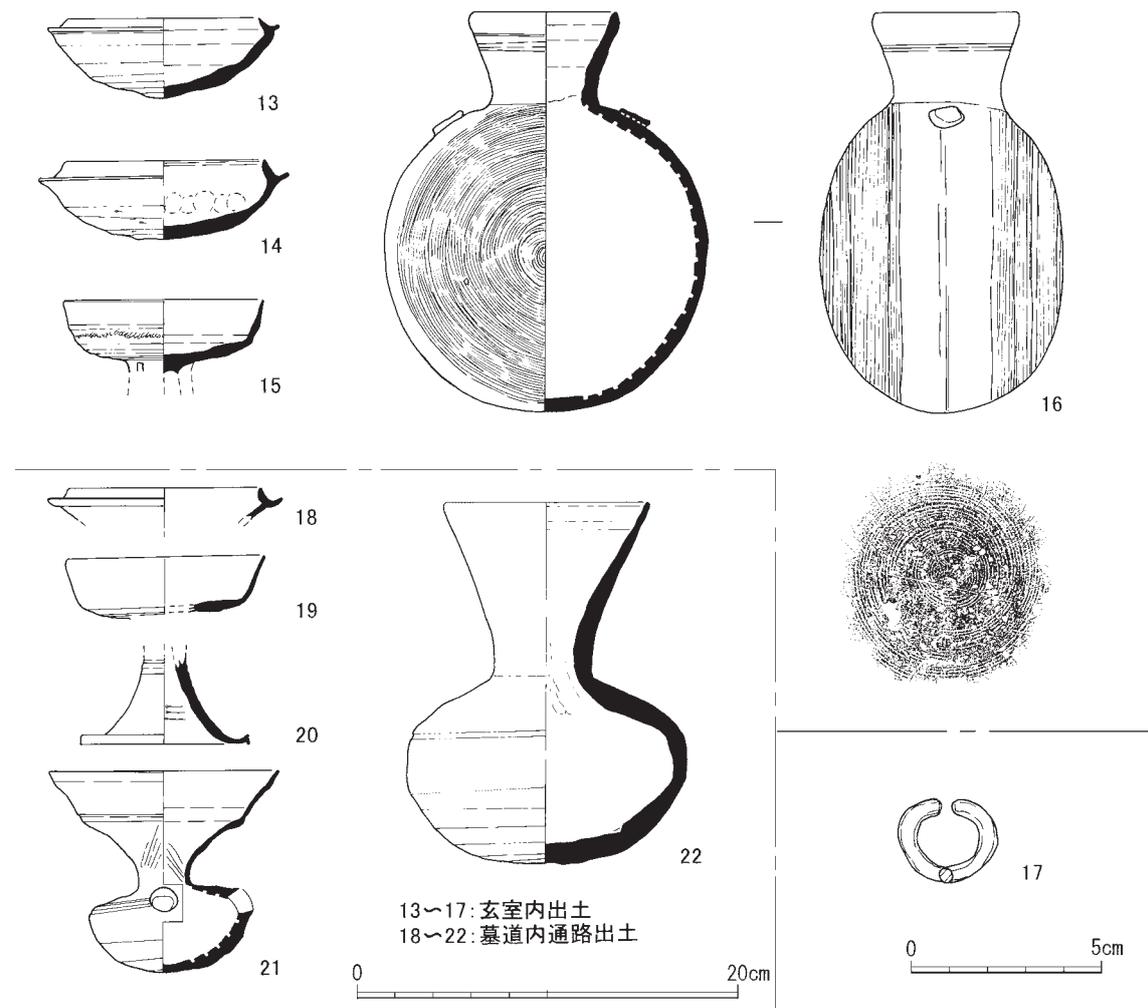
出土遺物(第12図)

13～17は、玄室内から出土した。13・14は杯身である。口径10～10.3cm、器高4.2cmを測り、

小振りで深みがある。15は高杯の杯部である。口径10.4cm、残存高3.9cmである。わずかに脚部の透かしの痕跡が残る。墓道出土資料と接合関係を確認したが、接合するものはなかった。16は提瓶である。口径7.4cm、体部径17cm、器高21.2cmである。体部にはカキ目が施され、片面に「×」のヘラ記号が認められる。把手は形骸化しており、肩部に円形の粘土板を貼り付けているのみである。これらはT K 209～217段階の資料と考えられる。17は金銅製の耳環である。断面形は楕円形で、長径4mm、短径3mmである。鍍金はほとんど剥落しており、薄い金箔がわずかに残っている程度である。

18～22は墓道内通路の埋土(第9図21層)から出土した。18は杯身である。口径10cm、残存高1.7cmを測る。19は高杯の杯部、20は高杯の脚部である。両者に接点はないが、同一個体の可能性がある。19は口径10.3cm、残存高3.1cmで墓道の先端付近で出土した。20は脚部径8.9cm、残存高4.8cmを測る。21は甗である。口径11.4cm、器高10.9cmである。22は長頸壺である。口径10.6cm、器高19.2cmを測る。墓道内でかなり広範囲に破片が分布していたが、ほぼ完形に復原できた。これらは横穴内の遺物とほとんど時期差はない。

③横穴S X 3



第12図 横穴S X 2 出土遺物実測図

横穴S X 2の西側で検出した南東方向に開口する横穴である。墓道の部分に相当する幅1～2.5m、長さ3.5m分を検出した。検出面の標高は31.5mである。玄室および墓道先端部分は調査地外に広がる。埋土は暗褐色礫混土である。後半期の調査で内部の調査を実施した。

④横穴S X 4

横穴S X 3の西側で検出した南東方向に開口する横穴である。墓道の部分に相当する幅0.8m、長さ3m分を検出した。検出面の標高は31.7～32mである。玄室および墓道先端部分は調査地外に広がる。埋土は暗褐色礫混土である。検出時に土師器片が出土した。

⑤横穴S X 5

横穴S X 1の東側で検出した南東方向に開口する横穴である。玄室から墓道にかけての最大幅2.2m、長さ9m分を確認した。東半分は調査区外に広がっており、今回は西半分を検出したことになる。埋土は暗褐色礫混土である。検出時に土師器片が出土した。10月以降に内部の調査を実施した。

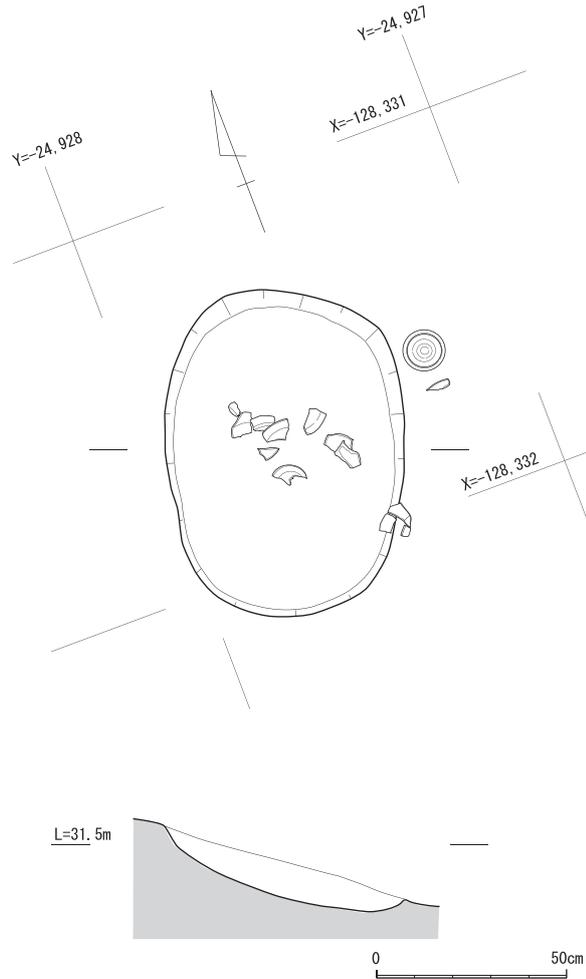
⑥土坑S K 6 (第13・14図)

S X 1の墓道とS X 2の墓道の間で確認した浅い土坑である。土坑の規模は長径0.85m、短径0.65m、深さ0.1mである。検出面の標高は31.5mである。遺構検出時に須恵器がまとまって出土したため、掘形の検出に努めたがこの時点では確認できなかった。

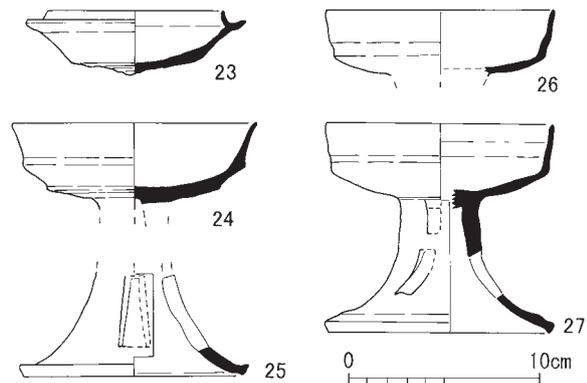
しかし、遺物取り上げ後に精査したところ浅い凹み状の掘形が確認できた。

出土遺物には、須恵器杯身・無蓋高杯・壺等があるが、図示できたのは4点のみであった(第14図)。無蓋高杯はいずれも脚部に方形2段透かしを施す。杯身(23)は口径9.1cm、器高3.4cmでかなり法量が小さい。TK209～217段階の資料と考えられる。杯蓋は出土していない。

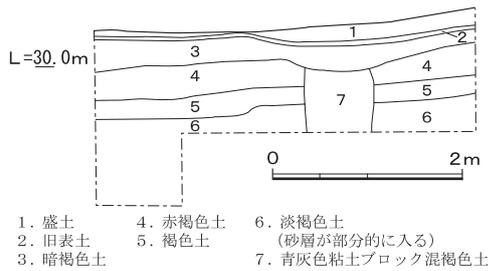
(2)第2トレンチ(第15図)



第13図 土坑S K 6実測図



第14図 土坑S K 6出土遺物実測図



第15図 第2トレンチ土層実測図

第1トレンチ東方の谷の南斜面の裾と考えられる位置に設定した調査区である。遺構・遺物は確認できなかった。重機で一部深さ2mまで掘削したが、表土の下には橙褐色土が厚く堆積しており、安定した土層にはいたらなかった。谷の南側斜面となる地形の変化も見られず、結果として谷の中央の深い部分に位置していることが明らかになった。

第1トレンチの南壁の状況と考え合わせると本来の斜面はさらに南東側にあると考えられる。

5. まとめ

今回の調査では谷の北西側斜面中央付近で横穴5基と土坑1基、墓地内通路、谷状地形を確認し、横穴については5基のうち2基の内部調査を途中まで実施した。2基の横穴は天井が完全に崩落していたため盗掘を受けていなかった。2基の横穴を比較すると、横穴S X 1のほうが横穴S X 2よりも玄室の規模が大きく、現状では副葬品等の種類や数量が多い傾向にある。横穴の時期は、出土遺物から6世紀末から7世紀初頭ごろと考えられる。

谷の南側斜面については、今回の調査区内で斜面自体を確認することができなかった。斜面はさらに南東に位置すると考えられる。

以上の成果から、先述のとおり拡張して横穴群の広がりや南東側斜面の状況を確認することを目的に調査を実施することとなった。今後の調査成果に期待したい。

(松尾史子)

注1 横穴の番号等については、今後の調査成果を待って整理していく必要がある。

注2 岩松保ほか『女谷・荒坂横穴群 京都府遺跡調査報告書』第34冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2004

圖 版

(1) 調査前状況(西から)

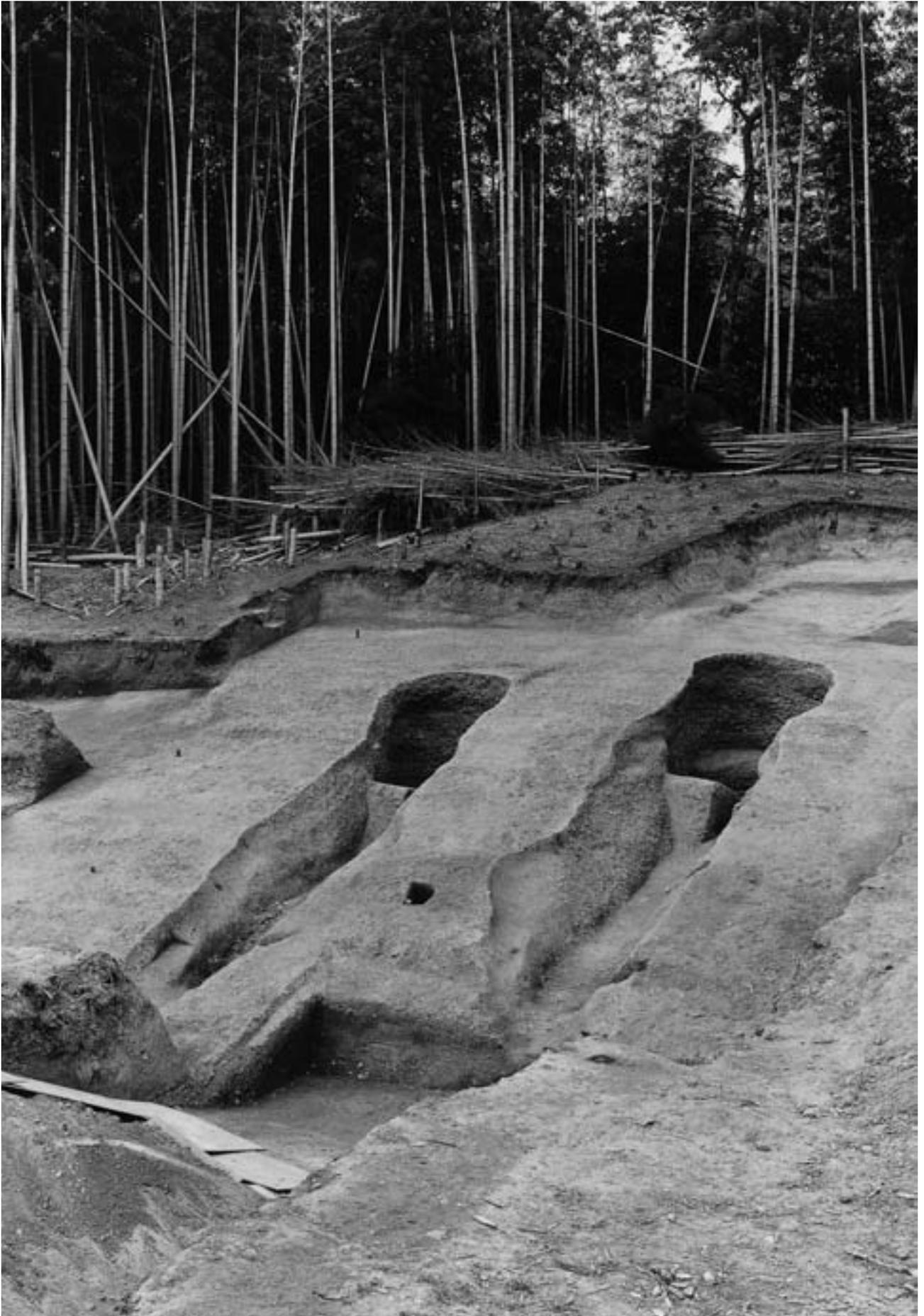


(2) 横穴検出状況(南東から)



(3) 作業状況(北から)





横穴 SX 1・2 全景（東から）



(1)横穴 SX 1・2 全景(南東から)



(2)横穴 SX 1・2・5 検出状況(南東から)



(1)横穴 SX 1 全景(南東から)



(2)横穴 SX 1 玄室入り口(南東から)



(3)横穴 SX 1 全景(北西から)



(3)横穴 SX 1 墓道先端付近断面(南東から)



(4)横穴 SX 1 玄室内土器出土状況(北西から)



(1)横穴 SX 1 玄室入り口付近断面(北東から)



(2)横穴 SX 1 墓道中央付近断面(南東から)



(3)横穴 SX 1 鉄鏝(11)出土状況(北から)



(4)横穴 SX 1 鉄鏝(12)出土状況(北東から)



(1)横穴 SX 1 玄室内土器出土状況(北から)



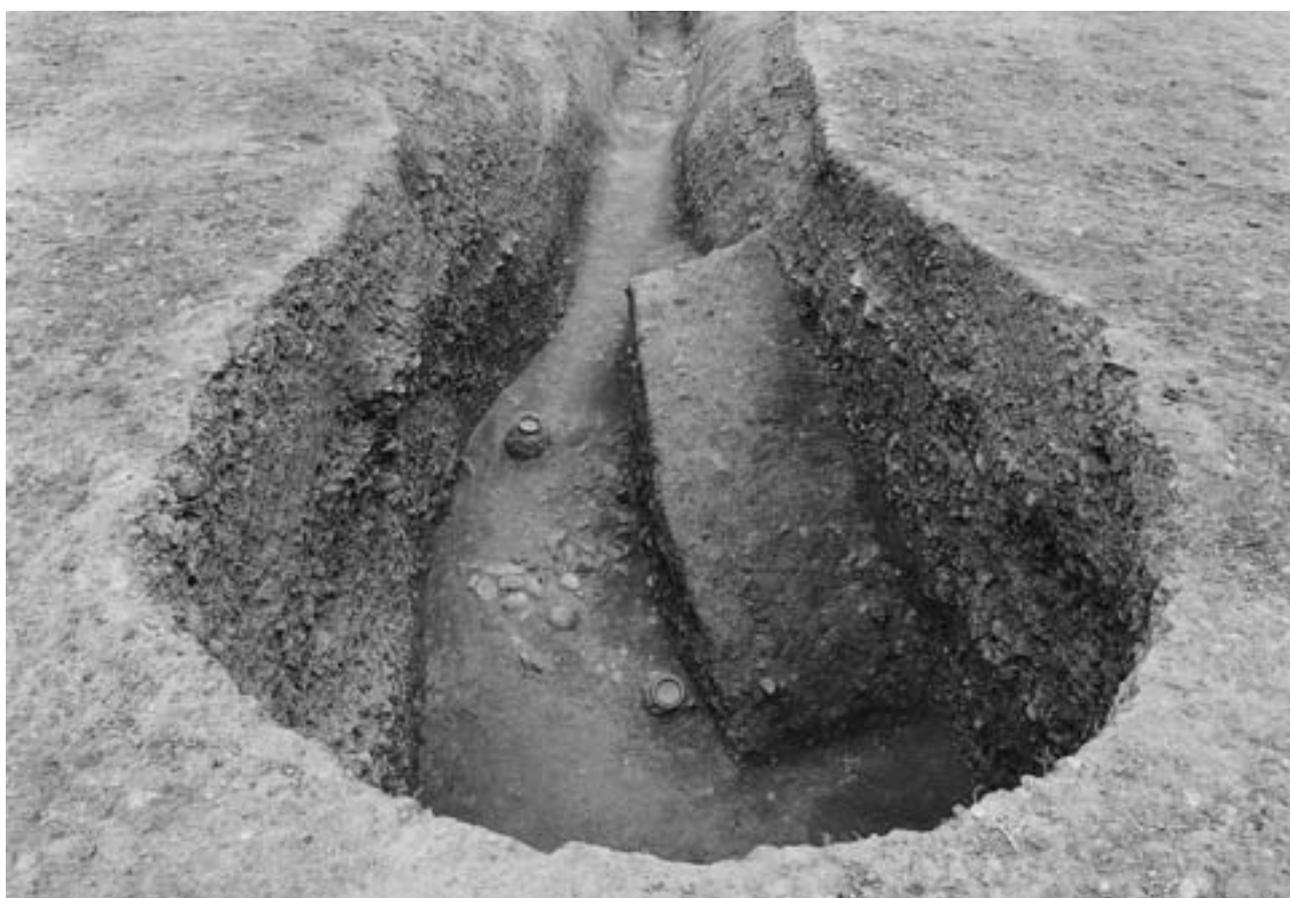
(2)横穴 SX 1 耳環出土状況(北東から)



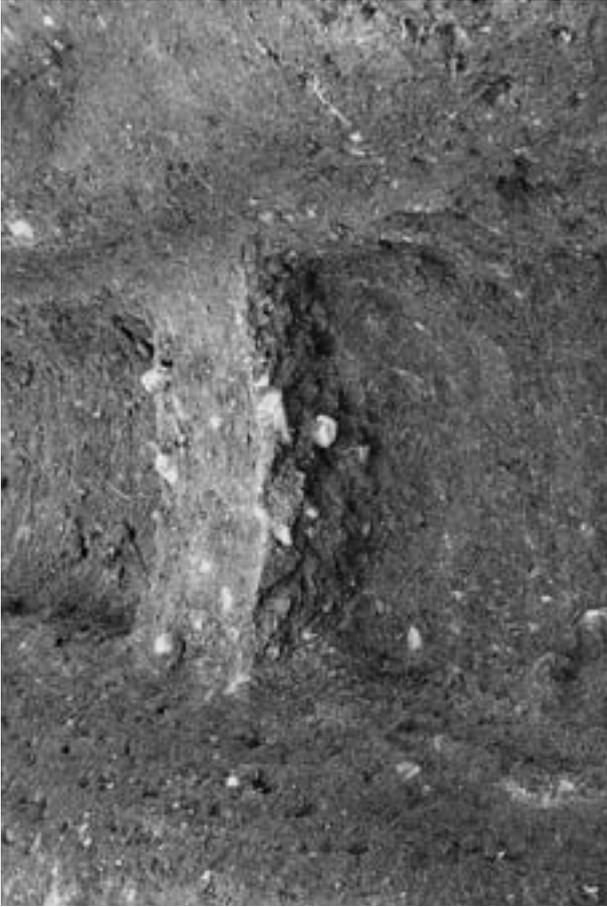
(1)横穴 SX 2 全景(南東から)



(2)横穴 SX 2 玄室入り口(南東から)



(3)横穴 SX 2 全景(北西から)



(3)横穴 SX 2 墓道内土坑断面(南東から)



(4)横穴 SX 2 墓道内通路遺物出土状況(南から)



(1)横穴 SX 2 墓道内通路検出状況(東から)



(2)横穴 SX 2 墓道断面(南東から)



(3)横穴 SX 2 耳環出土状況(北から)



(4)横穴 SX 2 玄室内遺物出土状況(北西から)



(1)横穴 SX 2 遺物出土状況(南東から)



(2)横穴 SX 2 提瓶出土状況(北東から)



(3) 横穴 SX 3・4 検出状況(北東から)



(4) 2トレンチ全景(南から)



(1) 土坑から SK 6 検出状況(南西から)



(2) 調査地西部検出谷部(南西から)





京都府遺跡調査報告集 第 137 冊

平成22年 3 月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141